

---

# 不思議の星のアリス

飯田

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

不思議の星のアリス

### 【Nコード】

N3377L

### 【作者名】

飯田

### 【あらすじ】

少女アリスが不思議の星「青い惑星」をたらたらと冒険します。いちおう恋愛も予定してます（\*＾o＾\*）

## 不思議ちゃんの冒険

「ここはどこ？ あたしは誰？」

一人の少女が目を覚ましました。

驚いたようにキョロキョロあたりを見回しています。

「マジここどこ？ あたしは……うーんとお……」

体にかかるGがなんか違うみたいです。あつ、Gといっても重力のGのことですよ。

「体が重い。えいっ！」

少女は上半身を気合いで起こします。

「わあ、ヤバイ、キレイな景色」

自分がだれかも分からないのに思わず見とれる少女。

「青い空、緑の森、そしてこの芝」

少女はちよつと首をそらして目を閉じます。

「こうしてると、自分がだれなんだか思い出しそうな感じ……」

「……アリス、アリス」

「！　そうよあたしはアリス！　青い惑星のアリスよ」

少女の顔に喜びが差します。

「そうだわ、あたしが『青い惑星のアリス』なんだから、ここは青い惑星に決まってるわ」

アリスは目を開けて満足げに空を見上げます。

青い空がどこまでも続いてて視覚に『青』が染み渡ってきます。

「さすが、青い惑星だわ」

アリスの不安が一気に解けていきます。

「あれ、？」

つづく

## 不思議ちゃんの冒険2

アリスはそのとき、空に小さな物体を見ました。  
それはすばやい動き方をして、うすいピンクに光ってます。

「なにあれ」

アリスが目凝らしてみると、1つだった光がいつの間にか分かれて青い空を飛んでいます。

「うわっ、増えてるし。なんか、ヤバくね」

アリスの目に不安の色が広がり、とにかく立とうとします。が……。

「体重……い！ 立てない」

必死で試みますが、アリスの体はマジ岩のように重く感じて立てません。

「あたしが重いわけないわ！こんなにスリムなんだから！そう  
だわ、こんなにあたしを重くするこの地点の重力が間違ってるんだ  
わ。……ここの重力、ちゃんとしなさい！！」

アリスが命令口調で言うと、体の重みが急に無くなってきました。

「あっ、立てる！こんなに体軽くなった。わあ……い！」

解放された気分で、キヤアキヤア喜びながら逃げ出します。

「あ、あれ。さっきの光、いつの間にか無くなってる」

少し駆けてアリスがそのことに気が付きました。

「不思議な光、どっかいつちゃった。まあいいか。……何だったんだろっあれ」

さらさらの緑髪をなで下ろしながら、アーモンド型の目が後ろを見ます。

透き通るような白い肌が紺のブラウスに覆われて、肩には緑髪が垂れる、そんなアリスは、確かにスリム、いえ、むしろ華奢に見える少女です……ほんとです。

「そうよ、怖いのもいなくなったことだし、こんなに軽くなったんだからちよつと探検してみよう」

アリスの細い脚が、次々にスカートから出されていきます。

「わぁー、空気がおいしい。青い惑星サイコー!」

「あれ……、あの子……」

つづく

### 不思議ちゃんの冒険3

「あれ……、あの子……」

アリスは向こうにたたずんでる少年に気づきました。

（あの子、どこかで見たことある。誰だったっけ……）

アリスは静かに目を閉じて、また首を後ろに反らせます。

（こうすると思い出せるから。……ジャック、そうジャックよ！）

アリスが少年のほうを見ると、いっぱいの笑顔でこっちに駆けてきます。

「ジャック、ジャック！ あんた何でここに？」

少年がそれを聞いて、いきなり固まります。表情も見事そのまま……。

「どうしたの、ジャック。急に」

少年の顔が、笑顔から怪訝なものに変わりました。

「ジャック？ なに言ってるの、ぼくはベルナルだよ。ねえ、アリス」

少年の表情が心配そうなものになります。

「うそ、あなたはジャックよ。あたしが間違ってるわけないわ。そうよ、ジャック、あなたはベルナルじゃなくてジャックよ！」

少年が一瞬感電したみたいになると、また笑顔になってアリスに話しかけました。

「そう、ぼくはジャック、ごめんアリス、自分のことなのに間違えて。アリスが正しい。ありがとう、ちゃんと言ってくれて」

色白でブロンドの美少年が、アリスの手をとります。

「いいのよ。だれにも間違うことはあるんだから。ジャック……」

「え？」

「あんたってほんとキレイな子。あたし悔しくなるよ」

「そ、そんなこと、ないよ」

ジャックは戸惑います。（アリスは女じゃん。ぼく男なんだよ。それなのに悔しいなんて）

アリスの手がジャックの手を払って、彼のカワイイ唇に伸びます。

「なによ、この唇。ばっかじゃない、キレイすぎ。もう、ありえないんだから」

アリスの人差し指はジャックの唇をなぞって、そつとその間に入れます。

「だめ！　じつとして。キレイな顔……。憎らしいぐらい」

アリスは人差し指を抜くと、自分の唇に当てて、リップを塗るようになぞりました。

唇が濡れて、光ります。

「……」

「……」

つづく

## 不思議ちゃんの冒険4

「……………」

「……………」

アリスの唇が濡れて光ってます。

それをジャックが恥ずかしそうに見ています。

沈黙のひととき……。

「なんであんなことしたの、ア……………」

「そうだジャック！ のど渴いた。なんか飲むもんちょうだい」

アリスがジャックの言葉を遮るように、いきなり言いました。きつと、さっきのことの照れ隠しなんでしょうけど……。

「ねえ、飲むものおー！ 早くちょうだいよ」

ジャックはかわいそうに、こんな大自然のなかで飲むものを買ってくることはできません。

「ムリムリ。アリス……………イジメないでよ」

美少年ジャックの目が、もう涙目になってます。

長い睫毛を涙の雫が渡って、うすいピンクが差した頬に流れていき

ます。

「あんた、泣いてんの？ てか、あんただって困るでしょ、このまま水分とれないと！」

それは正論です。

「ねえ、どうするつもりなのジャック。あんたはここに来る前どうしようと思ったの？ てゆうかさ、あんたはなんでここに来たの？」

これは「堂々めぐり」といわれる状況のようです。

「ぼくは……木こりのジャンさんに用があつて、森に行く途中だったんだけど……ジャンさんとはもう、そんなに遠くないから、向こう行つてから飲めると思つてたんだ。でも、アリスは今、水欲しいんでしょ……我慢して一緒に来てくれたら、ジャンさんの家で飲めると思うんだけど……どう、アリス？」

ジャックの目が、頼りなげにアリスを見ます。

「そう、そうだったんだ……。あたしジャックがそこまで考えてないと思つたから。……あたし、ほんとは、のどなんか渴いてないんだ。ジャック、キレイなあんたをイジメたかつたの。あたしのこの気持ち、分かつてくれる？ でも言つとくけど間違つてないから、あたしは」

アリスの目が、ジャックをしっかりと見据えます。

「うん。わかつた。じゃあ、一緒に行こう」

美少年ジャックの手が、アリスの手をとり、2人は歩き出します。

「ジャック」

「え？」

「……なんでもない」

つづく

## 不思議ちゃんの冒険5

アリスとジャックは深い森を進んで行きます。

「ねえジャック」

「うん」

「背中にキモイのがくつついてるんだけど」

アリスが緊張してます。

「え、……ひよっとしてヒルかな」

意外と平気なジャックです。

「なんかナメクジの大きいみたいなのが、吸い付いてるんだけど……」

アリスの声が震えています。

「やっぱヒルだ。あ、ムリして引つ張らないで、皮膚が破れるから」

ジャックの冷静な受け答えに、アリスは歩きながら慌てます。

「キモイから引つ張るなんてムリだよ！ でも、どうするの？ このヒル……」

ジャックの顔が意外にも笑顔になります。この美少年はアホなのでしょうか……。

「ヒルは血吸って腹いっぱいになったら自分で落ちてくから、大丈夫」

ほんとでしょうか。

「ほらアリス、もうそこがジャンさんち。早く行こう」

少し開けた場所にすてきなログハウスが建ってます。

「あれそう?」

「うん。いいでしょ、あの家」

うなずいたアリスが、ついでに気になるジャックの背中を恐る恐る見ると、ヒルがぽとっ、と落ちていきました。

「わぁ、ほんとだ」

「アリス、行くよ」

つづく

## 不思議ちゃんの冒険6

「こんにちは、ジャンさん」

ジャックが元気いっぱい挨拶します。

「ああ、こんにちは。ベルナール」

背の高い、締まった体のたぶん30ぐらいのおじさんがニコニコの笑顔で出てきます。

でも、あれ……この人たしかベルナールとか呼んでましたけど……。

「こんにちはベルナール、待ってたよ、早く入って」

少年は入り口で戸惑ってます。

「ベルナール、なに気分でも良くないのか」

少年は重い口を、やっと開きます。

「ジャンさん、ぼくはベルナールなんかじゃないよ。ぼくジャックなんだけど」

ジャンさんは両手を上げて、あの「お手上げ」のポーズをします。

「大人をからかったりして、まったく……。いいから入りなさい」

ジャックとアリスは家に入ります。

中は意外に広くて、奥にまだ何部屋がありそうです。

2人はテーブルに並んでつきます。

アリスがジャックの脇腹を突きます。

「ねえ、あんたがベルナルルってどうゆうことよ。あのジャンってオヤジ、人の名前間違えてるわよ。失礼だわ」

ひそひそと囁くアリスに、ジャックが困った顔をして答えます。

「うん、でもぼくだってさっき、アリスと会ったとき、自分の名前ベルナルルって、間違えちゃったんだから、ジャンさんのことは責められないよ」

人のよさそうな顔でジャックが言うのを、アリスはムツとして聞いてます。

「ベルナルル、このカワイイお嬢さんは誰。カノジヨか？　なんて名前？」

ジャンさんがテーブルにジュースの入ったコップを並べると、笑いながら訊いてきます。

「この子はアリス、アリス・ド・マーニユ。友達だよ」

ジャックの慌てた顔が赤くなってます。

「ふーん、そうかあ、友達ね」

ジャンさんが楽しそうに言いながら、テーブルについて2人と向かい合いました。

「ちょっと、あんた！ 黙ってきいてりや。あたしはアリス・ド・マーニユなんかじゃないわよ！ あんまりふざけるとウラ拳かましますよー！」

アリスの目がキッとジャックを睨みます。

「え、そんな……アリス。無茶苦茶言ってイジメないでよー」

と同時に、一瞬にしてアリスの裏拳が決まります。

椅子から飛び落ちるジャックの体。美少年の彼が悶絶してます。

「あたしは青い惑星のアリス。ジャックのばか！ ジャンさん、この子ヘンなところでふざけるんですね。イヤな奴！」

つづく

## 不思議ちゃんの冒険7

「立てるか、ベルナール」

ジャンさんがアリスの横でジャックを抱き起こそうとします。

「う、うん……。駄目みたい」

見てて情けなくなったアリスが、2人に向かって言い放ちます。

「2人ともまったく！ ジャック、甘えてないで立ちなさい！ ほら早く！ それにジャンさん！ なんですかあ！ さっきからジャックのことベルナールって言い続けて。ジャンさんって頑固なんですね！ あなた相手が子供だからって失礼ですよ」

アリスの声に、床（『とこ』）じゃなく『ゆか』（！）にいる2人がおびえます。

「お嬢さん、かなりツンなんだね……。ジャ、ジャック、そろそろ立てるか？」

「う、うん……。もう大丈夫だよw」

アリスがテーブルからジャックを見下ろして冷たく言います。

「だったら早く立ちなさいよ。……ほら大丈夫なんじゃん。あたしの裏拳がまるで効きすぎみたいにして……。デリカシーないわよ、まったく」

ジャックはそろそろと椅子に座って、またジュースを飲み出します。  
ジャンさんはアリスのことを引いた顔で見ながら、何か話題を作る  
うと、考えてるようです。

「あの、アリス」

ジャンさんが思い付いたように言います。

「そういえばきみはこのあたりに見かけない子だね。服装もジャック、そうジャックの友達にしては、かなりいいし。きみは、どっかエエとこの子なの？」

アリスの目がキラリと光ります。

「おじさん……」

「え、は、はいっ！」

つづく

## 不思議ちゃんの冒険 8

「……きみは、どっかエエとこの子なの？」

アリスの目がキラリと光ります。

「おじさん……」

「え、は、はいっ！」

「それって、あたしにボケ期待してるんじゃないわよね……あの偉大な芸人さんの鉄板ネタの……」

ジャンさんは口笛を吹いて、ごまかそうとします。どうやらアリスの勘は当たってたようです。

「おじさん、あたし責めてると思う？ あたしこんなに気取ってるけど、偉大な逢坂のお笑い文化は、理解してるつもりよ。学校の授業でもやったし……。だから、あたしボケるからちゃんと聞いてて」

アリスはカワイイ顔を、一気にしかめて自信満々に言い放ちました。

「だれがエテコの子やねんっー！」

それとほとんど同時に、ジャンさんのコケも美しく決まります。

ジャックは残念ながら2人の世界が分からないようで……おどおどして見えています。

「アリス」

「ジャンさん」

2人の目が輝きます。

「よし、きみとは意外にも波長が合いそうだから、お昼ごちそうしよう!」

アリスがカワイイ笑顔になります。

「お昼作るの手伝おうか？ ジャンさん」

ジャックは会話からぽつんと取り残されてます。

(……アリスが自分からお手伝い？ おかしいなあ、そんなキャラじゃないはずなのに……)

ジャックの頭にふつとある言葉が浮かびました。

(……オヤジキラー……)

つづく

## 不思議ちゃんの冒険9

「ジャンさん、次なにしたらいい？」

いつのまにかカワイイエプロンをつけたアリスがキッチンで微笑みます。

「タマネギみじん切り、大丈夫？ やれる？」

ジャンさんがウサギの肉を切りながら、顔を上げずに言います。

「うん、たぶんできる。やってみるね」

まな板にタマネギを乗せて……、アリスの手が止まります。

（こんなにコロコロしてるのを、どうみじん切りしろっていうのよ！ あのオヤジ。でもたぶんできるって言っちゃったしなあ……そう、ジャックに聞いてみよう）

アリスがテーブルで待つてるジャックを見ます。

「ジャック暇そうね！ ちょっとこつち来て！」

めんどくさそうにキッチンへ来ました。

「なにアリス」

「ちょっと、タマネギのみじん切り教えてよ」

アリスが食い入るように見つめます。

「知らないよぼく。料理なんかできないもん」

アリスのカワイイ顔が微笑みます。

「あんた、あたしに恥かかせる気？　今、どいつシチュエーションだか分かってるわよね」

ジャックの目が、まな板をゆっくり叩く包丁に留まります。

「うん、分かる」

「今度はさ、さっきの裏拳みたいに済まないと思うけど」

「あ、はい」

「いけませんねえこれは……よい子のみなさんはぜったいにマネしないでね。」

「だったら教えてよ」

美少年ジャックの目が、まだタマネギを切ってもいないのに、大粒の涙を流し始めます。

「まだ切っていないわよ。なに涙流してんの」

「ぼく、代わりにやる」

アリスが叩いてる包丁をぱっと取って、ジャックがタマネギをまな

板に置きます。が……手は動かず……。

「ええいつ！　こんなのーっ！　タマネギごときがあっ！」

すさまじい速さで振り下ろされてく包丁。まな板には、タマネギのみじん切りがちゃんとできていきます。

「うわっ、マジ……。ジャックやるじゃーん」

アリスの目が、見直したようにジャックを見つめます。

「どうだーっ！　……はぁー終わっただあ」

自己満足に浸るジャック。その横でアリスが不思議そうな顔をしています。

「切ったの赤タマネギだったっけ、ジャック？」

アリスの言葉に、陶醉からむりやり引き戻されたジャックが指の激痛に初めて気づきます。

「い、いだぁー！！　たぁーっ！！」

「タマネギどう？　切れた？」

つづく

## 不思議ちゃんの冒険10

それから約20分後……。

「どう、料理のほうは？ ウサギ肉のソテー、初めて？」

ジャンさんの和やかな質問に、アリスはナイフとフォークを動かしながら答えます。

「うん、初めて。やわらかくておいしい。ジャンさん、このハーブなんていうの？」

アリスは、いい香りに目を閉じます。

「それはオレガノ。気に入った？」

ジャンさんはアリスに微笑むと、自分の隣りにいるジャックに、肉切れをフォークで運んで食べさせます。

「ジャック、おいしいだろ？ 欲しかったら言ってくれよ。おれが口に運んであげるから」

ジャックは両手を包帯でぐるぐるに巻かれています。

「ありがとう、ジャンさん」

アリスの目線が、時々ジャックの手に行きます。

「ジャック、それじゃ困るでしょ、これから」

ジャックは偉い少年です。もとはと言えばアリスのせいなのに、ひとごとのような彼女の言葉にもキレたりしないのです。

「うん。でも家族とか友達が、いつもより優しくしてくれると思う。ケガするとみんなそうしてくれるもんなんだ」

アリスはそんなジャックを見つめます。

「友達のあたしにも優しくしてもらいたい？」

「え、うん」

アリスのフォークが向かいからヒュツと伸びてきます。今度は何の責め技だろうと、ジャックは緊張しますが……。

「ほうジャック！ よかったなあー、アリスはほんとに優しくして」

ジャンさんが、アリスのフォークから肉を食べているジャックを冷やかしします。

「カップル成立ーっ？」

ジャックが口にしたフォークを、べつに気にせず使うアリス。

でも、あれ……顔を赤くして……アリスw

つづく

## 不思議ちゃんの冒険11

……やれやれ、今日のお前は朝からいつもより酷くって……

……夫のぼくをジャックジャックって、初恋の子の名前で呼んだり……

……ヘルパーのジャンさんにまで、ぼくがベルナルじゃなくてジャックだと言いはったりして……

……奇行もかなりだ。このジジイのぼくを「きれいで悔やしい」とか言って、口に指を入れてきたり……

……お前の名前ジャンさんに言ったら、すごい勢いで殴ってきたり……

……それにお前は今日、朝からどっかに旅してるような錯覚があるみたいで……それも初恋の子ジャックと……

……アリス、でもぼくはかまわないんだ。お前はもう「不思議の星の人」なんだからさ……

「アリス」

「アリス」

う  
う  
く

## 不思議ちゃんの冒険12

「アリス、霊獣がそっちいったぞ」

アリスは目をキョロキョロさせます。

いきなり前に広がる草原。

一面空はくもり。

風が吹き付けていて……。

「アリス！ 霊剣を！ 早く出せ！」

アリスの記憶にあるこの世界……たしかずっと前、ここにいたような……。

「アリスーっ！」

声の主を確認することなく、自然に動く体。

アリスは地を蹴り、高く舞い上がる。

次の瞬間、姿を現した竜のような巨大霊獣を、アリスの右手からタイミングよく突き出した剣が捉えて、頸を突き通す。

吠え声を響かせてもがきながら、アリスを宙に放り出す霊獣。

「アリスーっ、お前の守護精霊を！」

宙に舞うアリスに届く声、スローで展開する光景。

（だいじょうぶ、心得てるから）

アリスの目が閉じられる。

「守護精霊よ、出でよ！」

いきなり光に包まれるアリス。そして自分より小さな女の子3人が、宙を舞う彼女の足にキスして支える。

「アリスさん、お久しぶりです。あなたの守護精霊のメンバー、リナとセナとマナです」

アリスは頷いて、守られている光の中で精霊たちと話した。

「メルカレードの父の具合は？」

「かなりお悪いです。霊剣の継承を急がれていらっやいます」

「まだ錯覚とかあるのか、悪霊のせいだ」

「はい、残念ながら。以前よりもますますお悪くなられて……」

「そうか……、私もここらが潮時なのかも知れない」

アリスは光に包まれたまま地上に下りたった。

彼女の視界に映るなつかしい仲間たちの顔……。

「アリス、召喚したかいがあった。異界からの無事帰還、おめでとう！」

それは古くからの戦士仲間、ベルナルだった。

「アリスお姉ちゃん、あたし剣の腕上がったんだよ！ 見て見て、ほら」

少女が笑いかけて、自分の守護精霊に剣をふるってみせる。

「あぶねえな！ ミント！」

かわいい男の子の守護精霊が少女の剣を難なく避ける。

「あ、こらっ！ 段どつといたのに無視したわねーっ！」

アリスが仲間たちと苦笑する。

追いかけてくる妹ミントと精霊の男の子……。

「あいかわらずね、ミントは」

アリスの目が楽しげに2人の姿を追っていた。

つづく

### 不思議ちゃんの冒険13

アリスたちが草原を抜けて田舎町にやって来る。

「ここならちゃんと結界ができてから安心だ。しばらくはこの町に身を置こう」

午後の光を受けて町のメインストリートを歩く戦士たち。その後を守護精霊たちが続く。

「アタシのアリスさんは強くてマジヤバいんだから。エトスのミントさんは？」

男の子の守護精霊エトスが吹きそうになる。

「ミント？ さっき見ただろーあのへなちょこな剣。うるさくてわがままだけのただのガキさ。戦士なんて言えたもんじゃない」

「そう……。エトスは大変だね。へなちょこさん守んなきゃならなくって」

戦士たちの後ろなので聞こえないと思ってる守護精霊たち。

「うん、そうだよハハハハハ！」

セナが慌ててエトスの口を押さえた。

「なに笑ってんのぉー。どうせろくなことじゃないでしょ？」

ミントだった。

「い、いてーなあ！ 耳放せよ！」

「ふん！ 守護精霊のくせに。あたしと歩きなさい。精霊同士だとなに言ってるんだか分かりやしない！」

ミントが耳を引っ張ってエトスを前に連れ出す。

「おいミント。そんな乱暴しちゃ守護精霊に悪いよ。守ってくれなくなっちゃうぞ！」

戦士の一人、アールが冗談まじりで言う。

戦士たちに起こる笑い。

「いいもん、こんなの。生意気だから、あたしが主人なの分からせるのよ」

ミントのまだ幼い声が言うセリフに、みんなウケた。

つづく

## 不思議ちゃんの冒険14

「ここが俺たちの当分いるとこだ」

戦士クアドランがアリスたちに一件の中層マンションを指し示す。

エントランスにはセキュリティがしっかり施されていて、彼らのような流浪の者など入り込む余地もないように見える。

「ムリじゃね？ 中に知り合いでもいんの？」

ダルトンが顎を突き上げて、クアドランを見る。

「心配するな。俺たちは戦士階級だ。不審者の類いじゃないだろ」

アリスがエントランスを見ながら訊く。

「関係ない、戦士の身分など……私たちは、知らない者の町では不審者と変わらない。クアドランどうする気だ」

彼の青い瞳が光る。

「簡単だよ。俺たちが戦士階級であることを機械に分からせてやるだけさ」

アリスの不安げな目。他の戦士たちも「それはありえない」という顔。

「俺はやるよ」

一人だけ認証機の前に行くクアドラン。

腰に帯びた霊剣を抜き、認証カメラの前で構える。

そのまま1分ほどがたち……、ドアが開いた。

「マ、マジで……」

「意味分らない」とゆう顔をして、しゃべりながら入っていく戦士たち。

「クアドラン、今のあれは？」

アリスが好奇心を抑えてクールに尋ねる。

「霊剣認証さ。最近の機械はできるようになってる。驚いただろ？俺が『実力』で、戦士であることを証明すると思ったんだろぅが……」

クアドランのニヒルな笑い。

「私の霊剣でもできるということか」

機械音痴なのを隠して、アリスはわざとクールな戦士を気取った。

つづく

## 不思議ちゃんの冒険15

マンション4階のエレベーターホールに出る彼ら。

「部屋はどこなんだ。クアドラン」

アールが辺りを見回しながら訊く。

「驚くなよ……この階すべてさ」

アールが驚くよりも早く、仲間が一斉にため息をつく。

「マジで？」

「ああ」

「だって、何部屋だよここ……」

「ざっと16戸ってところだろ。それも……ほら開けたから試しに1戸入って何部屋か確認して見ろよ」

いつのまにクアドランが鍵を開けている。（だが戦士階級の特権は、まだその程度のものではなかった……）

「へえー。……4部屋ある。それにダイニング、キッチン……」

アリスも彼らに混じって中を見て回る。一つの部屋で20平方メートルぐらいはある。

「でもこの階全部空き部屋ってわけじゃないだろ？」

アールが興奮ぎみに言う。

「いや、全部空きだ。そっか……まだ知らないようだな。どんなタイプであれ、マンションの4階と9階は全部、戦士が自由に使えるようになってる。これは『死』と『苦』を連想するものを忌み嫌った平民が出した苦肉の策といったところだな」

アリスは代々戦士階級の家柄だったが、集合住宅に住む必要がなかったため、そんなお得な情報など知る由もなかった。

「私は遠征のときも、ちゃんと金払ってホテルに泊まってたが……」

悔しそうなアリスにクアドランが冷笑する。

「それも方法としてはありだが……戦士が情報不足なのは致命的なのでは……」

つづく

## 不思議ちゃんの冒険16

夜、マンションを出てアリスと仲間のうち3人がメインストリートを探検する。

「やっぱ田舎町だなー。遊べるとこなんかほとんどねえーし」

ダルトンが吐き捨てるように言う。その手をしっかりと握る女の子の守護精霊ミオとリオ。

「お前いつのまに2人を出したんだ？ まあ姿は子供でもヒトじゃないわけだから、夜連れても問題ないんだろうが……」

尋ねたアールは守護精霊を出さないでいた。やはりその外見を考えてのことらしい。

「なによアール。精霊の力を信用してないの？」

リオの子供らしい甲高い声が響く。

「あたしたちのダルトンさんなんか、キャラはチャラいけどちゃんと信じてくれるよ」

「へへ、だってさwww！ こいつら俺のファンってわけーwww」

呆れるアール。そしてふと、あるものが 目に留まる。

「精霊？ あ、ちがう、 『ヤンキー精霊』」

夜の町が似合ってる彼ら。関わればかなりの戦士でも危ない存在だった。

「なんっすか？」

彼らがアールに目をつけて寄ってくる。

「べ、べつに……」

アールほどの戦士も緊張を隠せない。

「あれー、なんか具合悪そうですね、戦士さまwwwよろしかったら私たち精霊が面倒見ますよ……ってセリフ、言っちゃったよお俺www」

ヤンキー精霊たちの爆笑。

「アール、お前じゃムリだ……守護精霊を出せ、おいアール」

ダルトンのチャラさが全くなくなって。事態の深刻さが却ってはつきりする。

「俺は、呼ばない」

ダルトンと仲間たち全員が思わず息を飲んだ。

「えっ」

U  
U  
<U

## 不思議ちゃんの冒険17

戦士アールが守護精霊を出すのを、頑なに拒んでいるのを見るヤンキー精霊たち。

「え？ 自分だけで充分とか思ってます？ もしかしてあんたも、自分の守護精霊のこと信じられないとか……」

彼らのうちの一人、レンが急にマジな顔になる。

「そーゆーの1番ム力つくんだよねー、『守護精霊って、結局子供だから』みたいな」

アールの右手が霊剣を出そうとして躊躇う。

警戒しながらあることに気づいたアール。

（そっか、こいつら守護精霊のドロップアウトなのに、彼らよりずっと成長して見えるのは、心に傷を負ってムリしてるからなんだ）

レンの姿は、もう15歳くらいで普通の守護精霊よりずっと年上に見える。他の奴らもそうだった。

アールの手が止まる。やっぱり霊剣は出さない……。

「ムリだ！ アール！」

彼の態度に完全にキレルレン。

「俺のクソ主とおんなじじゃねーか！ なめてんじゃねーっ！」

ヤンキー精霊レンの攻撃が始まった。

アールの視界から彼が消える

と同時にアールの意識が途切れ途切れになる

遠くに聞こえてるアリスと仲間たちの叫び

そして急に広がる光と花畑

疲れたアールはそのなかにダイブして

安らぐ。「なんだ、全然悪くないじゃん、あのヤンキー精霊くん。とゆうか却って気持ちいいし」

夜の街頭に転がるアールの冷たい体……。

その表情は安らぎに満ちていた。

「……アール？ アールっ！！」

つづく

## 不思議ちゃんの冒険18

「アール……」

駆け寄った仲間たちが争って冷たくなった体を抱く。

「おい！ アールっ！」

悲しむダルトンたち。

アリスの顔が涙に濡れながらヤンキー精霊たちのいるほうを向く。

「おーっ、次はお姉さん？ でもちゃんと守護精霊出してよwww  
じゃないと今みたいに話にならないからさwww」

レンとは別の奴が笑って言う。

「いいよ……ほんととは、つらくせに……私は守護精霊を信用してる。彼女らはお前たちと違う！ アールの心も分からなかったお前たちなんかとは！」

アリスの目が閉じて静かに言う。

「守護精霊よ、出でよ」

一人マナだけが現れる。

「アリスさん、状況は分かってます。あたしだけで充分です。まかせてください」

そう言つて夜の街頭に堂々と彼らに向かえ立つマナ。

その幼い顔が、しっかりヤンキー精霊たちを見つめる。

「ほう、やるかガキ？ メンチきりやがつてwww」

「そうよ。あんたたちと違って、ちゃんと守護精霊の仕事させてもらうわ！」

連中がざわめく。14人全員がマナに突進してくる。

「うわーっ！」

……

「ごめんな、お前のこと信じてあげられなくて……」「ゼルムさん……温かい」

悪かったよ、お前はずっと守ってくれてたのに。……「クロードさま……温かい胸」

……

……

……

「ごめんな、レン。お前のこと呼ばないで勝手に戦って死んだりして。お前を信じて頼るべきだったのにな。俺バカだった。」「ノル

ムさま……、いいんです、あつ……あつたかいですノルムさま」

14人の小さな子供たちが、気持ちよさそうにマナの周りで寝ていた。

つづく

## 不思議ちゃんの冒険19

「ふふっ、よく寝てる」

さっきまでの姿が、うそのように、幼い姿で眠る彼ら　もう今は、完全に守護精霊に戻っていた。

マナの目が、それぞれあるじのもとへ消えていく彼らを見る。

そして……残った一人……主を亡くした守護精霊レン……。

5歳ぐらいの外見に戻った彼は、いつまでも消えないで夜の路上に眠りこんだ。

「そっか、この守護精霊、帰るとこないんだ……じゃあ、あたしがお姉ちゃんになってあげる」

幼い声で優しく言い聞かせるマナ。

彼女の小さな体が眠ってるレンを背負う。

二人のことをじっと見守るアリス。

マナのうれしそうな顔。

「アリスさん！ この守護精霊、今日からメンバーですから。えーっと、名前は……レン」

アリスのほうに歩いてくるマナ。

「うん、分かった。よろしく、ね」

アリスの手が、眠ってるレンのカワイイ手をそつと触る。

「行こうか。……今日は嬉しいことと悲しいことが一度に来ちゃって、もうパニックりそうだけど」

とつくにマンションへ帰ったらしい戦士たち。

アールの遺体もいつのまに收容機関が回収済みで……。

田舎町の夜景に、三人の背中が小さくなって……見えなくなつた。

つづく

## 不思議ちゃんの冒険20

それから数日後……

昼間の町を急ぐ一人の使者　アリスの実家に仕えるジイ（爺）、ラルフだった。

「急にや急にや……、おー、あれじゃ、あのマンションじゃ！」

昔は超イケメンだったのが今でも分かるラルフ。

アリスがドアフォンに出る。慌てた爺の顔……。久しぶりに見る。

「爺。どーしたの急に？」

「お父上が、大変でございまして」

「え……、いいから来て」

まもなく部屋に来る爺。

「アリスさま、た、大変でございます。メルカレードのお父上が失踪されました！　ああどーしましょーアリスさま！」

挨拶もなしにいきなり話す爺。

部屋にいたベルナールが心配そうに顔を出す。

「おー！　これはベルナールさま！　あなたもよくご存知のセラフ

イム卿が悪霊にたぶらかされてとうとう出奔なされました！」

爺が、すぐるようにベルナールの手を握る。

「そりゃ大変だ。でもちよつと掛けて落ち着いて……」

ソファーを指して座らせる。

アリスとベルナールは向かいに来る。

「ふうーっ。あ、そうじゃった、挨拶がまだでしたな。……アリスさま、ベルナールさま、お元気なようですねによりです」

爺が交互に見て微笑む。

「で、失踪の件でございますが……アリスさまには直ちにお帰り頂いて、当主の代理を務めて頂かなくては……」

爺の目が迫る。

「わ、分かつてる。私も覚悟はできてたから。それで、父の霊剣は……まさか」

爺は小さく頷いた。

「そのまさかでございます……だから大変なのでございます。恐らく悪霊はお父上の霊剣の魂になって……おおー、考えるだけで身震いするー！」

爺の顔が青ざめる。

「でももつと心配なのは……父の守護精霊たち、じゃない？」

アリスの言葉に爺が固まる……「そ、そうでした。守護精霊たちも、もちろん悪霊と一緒に……そのうちの二人はアリスさまと、もう一人はミントさまと兼務でして」

アリスが言葉を失う。

……

つづく

## 不思議ちゃんの冒険21

「……守護精霊たちも、もちろん悪霊と一緒に……、もう一人はミントさまと兼務でして」

……

同じ日、町の商工会で依頼された「地産うまいもの物産展」の警備にあたるミントたち。

「これ、やっぱあたしたちには役不足よ。……わざわざ戦士を雇わなくてもいいじゃない、こんなところ……。霊獣なんか来やしないって。結界あるし」

ミントが愚痴りながら、ちゃっかり「星うどん」をすすってる。

「さあさあ、どうぞ遠慮なさらず。戦士のみなさま！」

さつきから警備のミントたちに媚びまくる主催者の会長。彼にしたら、これがきつかけで、戦士階級という安定的な顧客を、捕まえられるかもしれないのだった。

「ねえ、エトス。あんたは精霊だから食べないし。マジでいる意味ないじゃんねwwエトス？」

ミントが口の中でうどんをはぐはぐさせながら見る。

側で笑う仲間たち。

「ねえ、エトス！ 聞いてんのぉ！ あるじの言うこと！！」

守護精霊エトスはさっきまでと違って、なんにも言わなかった。いつもミントには必ず口答えするのに……。

「エトス、……なに具合悪いの？ ちゃんとあるじのあたしを見て言いなさいっ！！」

笑っていた仲間のうち、クアドランが異変に気づく。

「ミントあぶない！！ そいつから離れて！」

ギクツとする彼女。突然そう言われると却って動けなくなる。

エトスの体が急に「暗く」なっていき、輪郭だけ残る。

「な、なにあんた！？ そんな術使って……」

さすがに泣き出したミント。幼い顔を涙でグシャグシャにする。

「ヤバっ、……遅かった」

クアドランの不気味な言葉と同時に、エトスの形にできてる闇から巨大霊獣が抜けて出ようとする。

「悪霊が……、結界を破った……」

エトスの輪郭が霊獣に押し広げられて膨張し、突き破られる……

「エトス……？、やだ、やだよーっ！！ もうやめてよーっ！！」

クアドランの手と霊獣のカギ爪がほとんど同時にミントに伸びた……

つづく

## 不思議ちゃんの冒険22

「うわーっ!!」

来場客の驚きと悲鳴。

次々に逃げ出す人々……。

彼らの顔が、ときどき霊獣のほつを振り返る。

巨大な体に、大人の霊剣を構える女の子が乗っていて……

その瞬間、ミントの体がパツとクアドランに向いて、妖気のようなものを漂わせながら彼の腰の霊剣を抜き取る。

かばおうとして伸ばされた彼の手が止まって、ぶるぶる震え出す。  
……クアドランの目が、自分の鳩尾みぞおちに刺さった霊剣を見る。……俺の霊剣……その柄を握ってる、まだ子供の手……（え、ありえないだろこんなのって）

スロー再生のような映像……現実……。

いきなり再生が戻ったように、倒れかかるクアドランを猛スピードで霊獣のツメが切り裂く。そして霊獣に駆け乗った女の子……それはクアドランの霊剣を握るミントだった。

「ひでえーっ！ うっっ！」

仲間のダルトンが悔しそうにわめく。

一斉に彼を引っ張ってダッシュする仲間たち。

辺りは和やかな空気から一転、パニックのただなかにあった。

「お、俺は信じない、信じないぞこんなの！　うそだー！！」

半狂乱になってダルトンが暴れる。

しかたなく、逃げながら彼の四肢をそれぞれ掴む仲間たち。巨大霊獣の上から、別人のようなミントが人々を見下ろす。

「なんでそんなに怖がるの？　悲しくなるからやめてよ……。やめてよー！！」

ミントのうつろな目に涙が溢れてきた

ルシファー、アタシ悲しい。悲しいよ……。

つづく

## 不思議ちゃんの冒険23

ミントの語りかける先に、華奢で優しそうな超美少年が現れる。

霊獣の上で一緒に座る彼ら。

「ルシファーね。あなたを見るの初めて。……もっと怖いと……。意外」

ミントが彼の顔をまじまじと見る。

「驚いた？ 『悪霊』のイメージと違いすぎててw」

ミントが大きく頷く。顔が赤くなってる。

「君は、ミント。戦士。とっても元気なんだよね、ほんと。でも、ぼくがきみのこと守護精霊つながりで支配したばかりに、こんなに温和しくなっちゃって。ごめんね」

美少年の顔が困ったように笑う。ミントの顔が熱くなる。……初恋？

「ううん。あなたといると心が落ち着く。だから、だよ」

ミントの中でさっきのことが蘇って、涙がまた出てくる。あの悲しみ、自分が怖がられているつらさ。（アタシはただ、弱いルシファーを戦士だから守っただけ。これからも守る、誰と戦うことになったって……）

ミントが、ルシファーに憑かれる前よりも、しっかりして見えた。

「おい、今がチャンスじゃないのか？ 戦士のみなさん」

戦意を完全に喪失してるダルトンたちに、壮年の商工会長が訊いてくる。

「なんだ！？ そのザマは！！ 戦えないお前たちなんか戦士と呼べるか！！ 今日のこと、責任持つて償ってもらいます。これがご縁で、今後お付き合いも長くなりそうですからね」

エゴまる出しの会長が、まるで「悪魔のように」笑った。

「あはははは！ 今日はおかげで、おいしいお得意さまができた！」  
霊獣の上では、ミントの胸に顔を寄せて、美少年ルシファーが安心する。

「ありがとう」

つづく

## 不思議ちゃんの冒険24

巨大靈獣がまだ動かないのを見て、商工会長は携帯端末で誰かを呼び出す。

「あー、私だが。ジェレン、靈獣が今居るんだがやれる雰囲気だから、緊急に新しい武器回して欲しいんだ。……そう、試験も兼ねてということでもいい。やり手武器商のきみを信頼してのことだ。できるだろう？ 代金は今回はずむ。それに戦士はもういるから、派遣をちよつとくれればいい。……分かった。すぐだぞすぐ」

会長の目が、疲れきっているダルトンたち戦士を見る。悪魔のような笑い……。

「お前たち！！ 今から武器が着くから、テストも兼ねて戦ってもらうよ！ くれぐれも雇い主はこの私であることを忘れんな！！」

戦士のうち、オーウエンが会長に寄ってくる。

「おまえ……、あの子がおれたちの仲間なの、見てたから知ってるだろ？ あの子もやれっていうのか？！ この悪魔！！」

掴みかかろうとした彼に、会長が冷笑する。

「言ったはずだ。私は雇い主だとな。ほら、さすがは、やり手武器商、早いもんだ。さあ、仕事だよwww」

上空から大型ヘリが降りる。

派遣たちによって運び出される最新武器の群。

彼らの数人がオーウェンたちの所に来る。

「『ピース武器開発』の試験スタッフです。よろしくお願いします。じゃさっそく使える戦士さん行ってもらいますので。……あなたと、そのあなた……」

派遣さんたちがマニュアル通りに「武器に耐えられる」戦士たちをチョイスしていく。

オーウェンは武器を渡され、ダルトンはもちろんハネられる。

「えーと、守護精霊を出してるかたは、試験資料にならないのですぐ消してください」

仕方なく従う戦士たち。

もうあとには引けない……。

そんな状況の変化を、霊獣の上から見つめ続けるミント。胸には気持ちよさそうに眠る、超美少年ルシファアの、か弱い肩が……。

「あんなの怖くない、怖くない。戦士たちだってもう仲間じゃない！ このルシファアをイジめる奴らなんか！」

ミントの顔が不気味に笑うと同時に、「対暗黒物質線」が照射してきた。

う  
う  
う  
う

## 不思議ちゃんの冒険25

「やめてっ!」

対暗黒物質線

ADRに全身を晒すミント。

まだ幼い腕にしっかりとルシファーを抱きながら……。

「あーっ!」

ミントの体がどんどん暗くなっていく。

(そうだ、アタシもうダメだからルシファーをこのまま逃がしてあげよう。ルシファー! 起きて)

苦しさをこらえながらミントが彼を起こそうとする。まだルシファーの体には異常がなかった。

「ねえ……起きて」

どんどん弱るミント。

「そっか、こうすれば……」

美少年ルシファーの顔を両手に抱いて、なんとか微笑むミント。そのまだ幼い唇が、そっと美少年の唇に重ねられる……初キス……。

そして……目覚めるルシファー。

「あ、きみか……」

顔を赤くする彼に、ミントがなにか言おうとするが、もう声にならない。

巨大霊獣のほうも、空にぽっかりできた闇になっていて、いないのと同じ状態だった。

「ごめん、ぼくのせいだ。ぼくもいつしよに闇になる」

ルシファーがそう言ったとき、ミントは既に闇化していた自分の中に、ルシファーを抱き入れた。

青い空にミント形にできた闇に、沈むルシファー。

でもその闇は、愛の温かさに満ちて、まるで胎内のように……

……

「ミントーっ!!」

すべてを目撃した戦士たち……。

ある者は、敵として……ある者は彼女を裏切った者として……。

あとには2振りの霊剣が……残った。

「戦士のみなさん、お疲れ様です。ここで試験を終了します」

無感情にアナウンスする声。

参加した戦士たちは、鉛のような気分でハネられた仲間たちのとこ

るに戻ってくる。

「……」

「……」

「おい！ きみ」

会長が派遣を捕まえて、戦士たちにわざと聞こえるように言う。

「あの2本の霊剣、拾って来い！ あれを武器商に高く売りつけて、金にしてやる。いや、アンティーク商でもいいwww」

ダルトンの目が、戦士の魂であるそれをぼーっと見ている。

回収される2振り……。

その上にまだそびえる巨大霊獣の形の暗黒 空間にできた結界の  
破れ……。

「ほーう。大人用と子供用の2本か。セットで売ったほうがいいかどうか……」

商工会長はもう商売のことを考えていた。

つづく

## 不思議ちゃんの冒険26

「はっ」

アリスの体が一瞬戦慄する。

「どうされましたか、……アリスさま」

爺のラルフが心配そうに見つめる。

「大丈夫か？ 顔色がヤバイようだけど」

隣から覗き込むように見るベルナル。

アリスは作り笑いをしてみせたが、誤魔化せないようだった。

「た、大変なんだ……あ、ごめん。なに言ってるだろう私……。…  
…大変なんだ！！ ……あーっ！」

2人の見てる前で、明らかに異常を起こすアリス。

そして彼らが言葉を失つてると共に、アリスの体から父の ルシ  
ファーに憑かれて失踪したセラフィム卿の こもった不気味な声  
が「出て」くる。

「大変だぞ！ ラルフー！ 私のあの可愛いミントが……ミントが  
！！」

思わず右手から霊剣を出すベルナル。

そして、もうどうすればいいやら、という顔をして、固まる爺。

「おお！ ベルナル！ 久しぶりだな。そなたも今聞いただろう？ ミントが、娘が大変なんだ！ …… 恐れなくてよい。私は、私だから」

ベルナルの戸惑う表情。そして一応、靈剣は収められる。

「お、おいたわしゅうございます、ご当主さま……」

ラルフがアリスを見てやっと言葉を言う。

テーブルを挟んでソファーに座る3人。そのシチュエーションには、さっきまでとなんら変わりはない。

「ラルフよ…… ちょうど良かったではないか…… これで跡目の問題は解決できたのだから」

アリスの口は動かず、体の中から出てくる声。

「そんな、お戯れを……」

ラルフは爺でも意外に気が強くて、もうこのありえない状況に慣れてきたようだった。

「で、ミントを、ミントを救って欲しいのだ」

アリスの「体が言う」言葉に、爺とベルナルは顔を見合わせる。

U  
U  
<U>

## 不思議ちゃんの冒険27（前書き）

このたびは日頃の感謝と致しまして、ハーフタイムショーをどうぞ。

## 不思議ちゃんの冒険27

「コラッ！ ダメじゃないエトス！！ ちゃんとやらないと」

ミントが霊剣を振り回してエトスにダメ出しする。

「うんっ」

あいかわらず可愛げのないエトス。

するとどこからか、女性MCのアナウンスが……。

「さあ、それではいつも読んでくださるかたがたへの感謝の印に、歌っていただきましょう！ 『FAIRY BOY』、エント！！」

「ほら」「……」

いつもあたしを困らす

きみはいたずらBOY

でもいつも側にいて

あたしを守るAGENT

Ah…My fairy boy

Keep guarding me fully

A s I s h a l l a l l o w y o u f u l l y

歌って踊るエトスとミント、略して「エント」

ヒップホップなダンス……

……彼らのショーが終わる。

「ちっ」

「なによ、エトス。……でも頑張ったねアタシたち」

「うん」

「ふふ」

お読みのみなさま、ハーフタイムショー、楽しんでいただけました  
でしょうか……。

## 不思議ちゃんの冒険28

2、3時間が過ぎてマンションに戦士たちが戻ってくる。

一様に暗く疲れた顔の彼ら……。

部屋に来て、そのまま床に倒れ込んで休みたいという思い……。

だがそんな彼らを待ち受けていたのは、異常をきたしたアリスと「セラフイム卿の霊魂」の結合体だった……。

部屋に入るなり固まる彼ら。

まずアリスのありえない状態と、それをなんでもないように受け入れる2人。

さらにアリスの体の中から出ている卿の声すら普通に受け入れてる2人　ベルナールとラルフ。

ミントのことがあって、戦士たちのうち卿を知る者は、その目の前の光景に、思わず気を失いそうになる。

「……」

「諸君、私が怖いかな」

アリスの体から出るこもった声……。ベルナールたちは何でもないことのように振る舞う。

「ミントは消えました」

ダルトンが怒り出した。

「消しました、だろう？」

つづく

## 不思議ちゃんの冒険29

帰ってきた戦士の1人、オーウェンがダルトンの口をふさぐ。

耳元にささやくオーウェン……。

「今は……今はとにかく言い方に気を付けてくれ。分かるかな？」

彼の語気の圧力……。

アリスが いや正確に言えばセラフィム卿が、ダルトンの言葉に「うなり声」を上げる。……それは人のものではなく、まるでハイエナみたいな……。

「アーイ、アーイ」

やっぱり悪霊のせいなのか……。

「そうだよ！！ ミントはオーウェンたちが『消した』。おれは止められずにただ見てた……。悲しけりやそうやって鳴けよ！！ よく似合ってるよ、その声」

すでに限界だったダルトンがこわれる。

鳴き声を真似て、卿と一緒に『鳴く』。

「やばっ……。やばいよオーウェン、この部屋出よう」

そんな彼らに注がれるベルナールと爺の凍りついた視線……。

「くそっ！ この連中どうかしてる！ 行くぞオーウェン！！」

「たしかに……ひどい……」

悪霊のせいなのか、魂を取られたようにオーウェンがつぶやいた。

「お前ら、話は終わってない」

突然立って、口を閉じたままオーウェンたちに掴みかかってくるアリス。体からは父の声が響く……。

「あ！っ」

つづく

## 不思議ちゃんの冒険30

「お前ら、話は終わってない」

父の声とともに、掴みかかってきたアリス。

放心状態のオーウェンがまず捕まる。

その隙に急いで部屋から出て行く仲間     ミントを消すのに従った者たちだった。

アリスの手がオーウェンの胸ぐらを掴む。

「『消した』というのは本当か！？ 言え！」

アリスの体内から搾り出てくる父セラフィム卿の声。怒りに震え、おぞましさに満ちている。

だがアリス自身のほうは、口を固く閉じ、まるで父の状態を悲しむようにただ涙を流している。

オーウェンは答えない。

アリスの右手甲から霊剣が滑り出て……。

シューッ、パラパラパラ……。

アリスの前に、がっくりと膝を落とすオーウェン。

彼の血しぶきに染まっていくアリスの美しい顔……頬の血に混ざっ

てゆく涙……。

後ろにいた爺とベルナールが、無言でそれを見守る。

それを見て仲間のうち部屋に残っていたダルトンが　すでにこわれていた　『カラ笑い』する。

「ははは、アリスきれいだ！　ははは」

彼女の中から出る声。

「ダルトン、お前は笑えるのか？　ミントを裏切って」

根が優しい彼は、急にキレてわめき出した。

「ああそうさ。裏切った。どうせおれは使えないヤツさ。それに、それにてめえみたいな悪霊には使えないが、生きてるおれたちには大事な『カネ』ってものが要るんだ……。カネだよカネ……。ミントを裏切ったらずいぶん貰えたよ、カネ……。悪霊は関係ないんだよなカネなんか……。ふざけやがって！！　いい気なもんだな悪霊さまは、ははは」

そう言つてダルトンの拳がアリスの胸　声の出ているあたりを何度も殴る。

「カネ、カネ、カネ！！　カネなんだよ世の中は、この悪霊！！」

ダルトンの首に、アリスが吐いた血がかかる。

涙を流し続けるその血塗られた美しい顔。

「カネ、カネ、カネ、……カネ！」

ダルトンがやっと思える手を止めた。

「……だつてさ、おれたちは生きてかなきゃいけないんだ、現実を……お前みたいな悪霊と違って……ラクになりたいなあおれ……」

胸を押さえて崩れていたアリスが、ダルトンのその言葉に応えるように、霊剣を出して下から突き上げる……。

アリスの髪に勢いよく降りかかる血……。

つづく

### 不思議ちゃんの冒険31

アリスの体が、降りかかる血の雨を浴びながら、かがみ込んだ姿勢のままにいる。

彼女の意識に広がってくる暗黒の安らぎ。

……彼女もいつのまにかよく知っている超美少年、ルシファーが華奢な色白の体を暗闇に浮き立たせる。そして左に彼女の父セラフィム卿が立って、なにかを話している。

「ミントを失った！！ 私の末っ子を！ カネで買われた戦士たちによって……それも長女の仲間たちによって」

嘆き続ける卿を、事件の元凶であるはずのルシファーが慰める。

「きみは分かったんだ。どれだけ人間が悪なのかを。その元はカネだというの……。ぼくにはダルトンが死ぬ前言ったように、カネの能力はない。それは悪霊にはカネが要らないからなんだ。ぼくに必要なのはただ『愛』することだけ……ずっと昔、まだ神と天使たちがいた頃、愛は彼らに守られてただけど、カネに彼らが滅ぼされたあと、ぼくは恐れて愛で身を守ろうとした。……そして今までそれを通して。愛はカネという人間のツールをこえるものだと信じてる。だって、なにより悪霊のぼくが愛によって生き延びてるんだからねwカネの時代を」

卿の意外そうな表情……神と天使はとくにカネで滅んで、愛を残った悪霊が相続して受け継いでいる……

「悪霊よ」

「なに？」

卿の食い入るようなまなざし。

「きみは愛そのものなのか？」

卿の質問に寂しく微笑んでうなずくルシファー。

「神が力ネに滅ばされた今は、愛はばく、ルシファーそのものさ」

卿が悪霊を笑う。そのあまりに皮肉な運命に。

「あれ、笑って……元気出てきたみたいだね」

（人間が力ネの真実を知ったとき、悪霊よりも悪になる）

つづく

## 不思議ちゃんの冒険32

アリスの脳裏に続く暗黒……。

父セラフィム卿がルシファアの答えに顔を明るくする。

「きみが愛だというのなら、その力でミントのことを戻してくれないか？」

ルシファアの微笑み。

「あなたは自分が何をしているか分かっていない」

卿が少しイラつく。

「分かってる！ 分かったうえで悪霊のきみにお願いしてるんだ。どうか、どうかきみの愛で娘のミントのことを！」

暗闇に浮き立つ卿の青白い顔。アリスの脳裏に浮かんだ言葉「パパ

……」

そして卿に頷いてるルシファア、……なにかを言っているようだが聞こえてこない。

卿の顔がどんどん苦しみに満ちていく。

そして消えた2人……。

……

「アリス！」

声で意識が戻る。

気付くと目の前にはベルナルルの顔が……。

それに横から割り込む爺の顔。

「そのー、衣類と体は洗ったから……ひどい血の汚れだった」

ベルナルルが顔を赤くする。

爺のフォローが入る。

「お分かりでしょうアリスさま。メイドがおりませんので仕方なく私どもで洗わせていただきました。……」

すっかり普通に戻ったアリスが、自分を見回す　新しい衣類に、血をきれいに洗い落とされた体……ボディーシャンプーの匂い。

「……べつにいい。私も戦士だ。そんな状況になることだって覚悟してる。……ベルナルル、お前も私の体洗ったのか？」

アリスの美しい目が睨む。

「い、ごめん」

アリスの顔が真っ赤になった。

u'u

### 不思議ちゃんの冒険33

「で、私のどこまで洗ったの？」

言いづらそうに、でもはつきりさせときたいという表情で尋ねるアリス……。

「全部……」

ベルナルの目が泳ぐ。

「ぜ、全部？」

声が小さくなるアリス。

「それって、……ここも、あそこも、どこも？」

頷く彼。

「そう。どこも全部……」

アリスは自分の養育主任だった爺が洗ったのだばかり思っていた。

それならまだ自分を納得させることもできた。でも……

「ベルナルさまは爺の体を気づかって、ほとんどご自分で洗ってくださいったのです。アリスさまのあられもないお姿を前に、戦士の道に従って一生懸命劣情に耐えておられ……ほんに爺はベルナルさまに感謝致しておるのです」

アリスの顔が真っ赤だった。

「爺、そんな……、爺？」

急に尋ねるアリス。

「私は……すべてを見られ触れられたベルナールと結婚しなくてはならない？」

爺はニコニコの笑顔になった。

「アリスさまがベルナールさまを愛しておられるなら、そうすればよろしいでしょう。他人の体は異性でも、実際その匂いや汚れで嫌悪してしまうものです。それを洗い流してくれただけでベルナールさまの『愛』は十分に確かといえます」

アリスの美しい目が再びベルナールを見る。

「愛してるの？ 私を」

つづく

## 不思議ちゃんの冒険34

「愛してるの？ 私を」

アリスに頷くベルナル。

「ああ、もちろん」

……

「もちろん。ぼくはきみを愛してる。ミント」

暗黒の中に、泣き崩れるセラフィム卿と一点にささやいているルシファーの姿……。

「ミント、ぼくはきみのパパと契約したんだ。ぼくは愛できみを救うとね。だからミント、ぼくは愛を受けて戻って」

言い終わったその瞬間、暗黒の一点に収縮するルシファー。(……温かい暗黒と羊水だ)

それに合わせるように、卿が大声で泣き叫ぶ。

「私は、私はなんということをしたのだ!!」

……

「おい、あれ見ろ!」

靈獣の形にできてる暗黒　　結界の破れ　　の上的、子供形の暗黒  
が急に『成長していく』。

すぐに10代後半ぐらいのシルエットになって止まる。

見上げる人々に映った次の光景……

少女形の暗黒　　結界の破れ　　が物質の姿を取り戻していく。

そして靈獣形の暗黒を伝って彼らのところに降りてきた。

「みなさん、アタシはミント、セラフィム卿の末娘です」

人々の驚愕して固まった顔……。

16才くらいに成長した美少女ミントがたたずんではる。

「だれか、妊娠したこのアタシをお世話してください！」

無言の観衆。（……）

「お願いです！」

そこへ向こうのほうから、珍しく彼女と同じ年ぐらいの精霊がやってきた。

「ミントー！」

「……エトス？　エトスね！」

その精霊は、外見は大きかったが、まぎれもなくミントの守護精霊  
エトスだった。

「ミントさん。あなたを守るためにこの姿で戻りました」

彼女のお腹を優しく撫でて、顔を赤くするエトス。

ミントの母性的な笑み。

「愛してる。あなたを」

つづく

## 不思議ちゃんの冒険35

灰白色の施設の庭にびっしり敷き詰められたタイル……その小片の一つ一つが戦士の墓石の代わりをしていて……最近死んだことを記すアール、クアドラン、オーウェン、ダルトンの名が――。

「う、うーっ」

あちこちで聞こえてくる嗚咽、すすり泣き。

タイルの上に立って涙を流す人たち、そして元守護精霊……

「あたしは、ダルトンさんを殺したアリスを許さない。……許さない。たとえそれが『守護精霊協約』に違反してても――！」

一人の女の子の精霊、リオ……。憎しみで眉間にシワが刻まれている。

「許さない、アリス。そして彼女を守る者たちすべて……」

リオの指が慕うようにダルトンの碑銘をなぞる。

（あたし、ダルトンさんを愛してた。ほんとは人間に生まれて、女として彼を愛し子供が欲しかった）

考えながらリオの中で広がる罪悪感……守護精霊の禁則事項を破っていることの恐怖。

「いいわ。決めた。やる」

u  
u  
u  
u

## 不思議ちゃんの冒険36（前書き）

「許さない、アリス。そして彼女を守る者たちすべて……ふふ」

## 不思議ちゃんの冒険36

2ヶ月が過ぎ……

「おめでとう、お姉ちゃん！」

ミントの笑顔。

その向こうにたくさんの友だちの笑顔が。

アリスを取り囲む祝福。

そう、今日は女があこがれるあの日、挙式当日だった。

「マジキレイ！ お姉ちゃん良かったね」

あの事件でアリスと同じ年になったミントが同じ視線で微笑む。

（この子はあれで良かったのかな…私なんかよりずっとキレイになったのに）

友だちの中からミントを見守ってる守護精霊エトスが見える。ミントはまだ妊娠2ヶ月の不安定な時期。

「アリス、こっちも向いて！」

「アリス！キレイ！」

「こっちも見えて！」

幸せの絶頂を感じるアリス。まるでこの世のすべてが自分を祝福してくれてるように……。

「アリスさん！」

彼女の守護精霊のメンバー全員がカワイイ姿で走ってくる。

きれいにコーディネートされた衣装に身を包んで。

「アリスさん、もうすぐお式が始まります。行きましょう！」

マナとレンが姉弟みたいに言う。

「分かった。……とうとうこの日が来たんだ」

胸に手を当てて目を閉じるアリス……噛みしめる幸せ……

（歌が聞こえてる。この式場ではなくもっと遠くのほうで……小さい女の子のきれいな声。うれしさと悲しさが混ざり合うような……。

花の種を植えたの……芽が出て伸びて……きれいな花が咲いたの……そして女の子がやってきて……花を摘んでいった……あたしの枯れて……種も残らなかった……）

「さあ行きましょう、お姉ちゃん」

つ  
づ  
く

ふ  
ふ  
つ

不思議ちゃんの冒険37（前書き）

「ふふ、幸せ？ アリス」

## 不思議ちゃんの冒険37

アリスの前の扉が開く。

溢れ出す光。

と同時に流れ出す音楽。

まっすぐに延びる長い通路を、ゆっくり歩き出す。

隣には、失踪したままの父の代わりに妹のミントが腕を組んで歩く。

大好きないい歌が流れ、体中に視線を感じながら、ベルナールの待つ祭壇に進む。

ゆっくり流れる時間……このまま止まってしまいそうなのに……。

「ふふっ」

誰？

さりげなくミントを見る。でも彼女ではない。

「ふふふっ」

また女の子の声……

後ろに仕える自分の守護精霊の誰かだろうか……でも声が彼女たち

と違う。

「ふふっ」

気になる、まさかこれマリッジブルーなのだろうか……

「ふふ。幸せ？」

またする声。

音楽はちゃんと聞こえている。

「アリスお姉ちゃん、大丈夫？」

ミントがそつとささやく。

頷くアリス。

もうすぐそこに、ベルナールがいる。

音楽が終わりかけ、アリスの足が最後の一步を踏み出す……

「ふふ、ふふふふっ。幸せなんだあアリスは」

声のするほうに思わず振り向く。

すぐ左前の最前席から小さな女の子が振りかえる。……あ。

「知ってるでしょ、アタシを」

その眉間に刻まれてる、子供にはありえないぐらいの深い憎しみのあと。

ふふっ

つづく

## 不思議ちゃんの冒険38

アリスの様子に気づいたミント。組んでる腕を自分のほうへ引き寄せる……。

「分かったお姉ちゃん。でも今はちょっと……」

承知のうえで、アリスにささやいて普通を装うミント。

あともう少し、その女の子の精霊リオが攻撃性を示していたら……きつと反射的にアリスの右手が霊剣を出してたに違いない。

「今は落ち着くの。いい？ お姉ちゃん」

ミントのほうが姉みたいに、しっかりアリスのことをベルナールに渡す。

誓いの式が始まる。

その前で、アリスの守護精霊たちがリオの座つてるところをさりげなく取り囲んだ。

「ごめんなさい、ここいさせていただきます」

次々に席を譲る周囲の招待客。アリスの守護精霊と知っての気づかいだった。

彼女らに囲まれたリオ……「ふふっ」

「協約違反だ、リオ。第25条によってお前を直ちに無力化する」

子供らしい声で、周りに気をつかって小さく宣告するアリスの守護精霊たち。

リオの目が、なぜかこの場になってもまだ薄笑いしてる。

「開始」

アリスの守護精霊たちが無抵抗な精霊リオの霊力を抜き取っていく。静かに進められる作業。壇上では、お互いの誓いが終わって指輪贈呈とキスに入るところだった。

「いいでしょ……リオは消えてってるわ」

アリスの守護精霊たちが『かわいいエージェント』になって、リオのことを消そうとしている。

「完了」

それは不気味な響きだった……。

「」

つづく

## 不思議ちゃんの冒険39

祭壇の前でキスを交わした2人……その瞬間……

アリスの胸に言いようのない「飽き」が広がってくる。

とにかくムリ、もう彼のすべてが……。まるで「魔法かなんかのせい」で、急に愛が冷めたように……。

アリスの中で、幸せの絶頂に感じられたこの結婚式が、今は親族・友人への義理感で幸せを演じなければならぬ場になっている。心は鉛のように重い。

「早く終わらせましょう」

アリスがキスを止めてベルナールに言う。その飽き飽きした顔。

「な、なに言ってるんだ急に」

ベルナールは意味分らないという反応だったが、アリスの様子がマジ冷たいので、不快になってくる。

「なあ、アリス！　なんだよそれ！　おい！」

まったく予想外のアクシデントだった。

「うげ。一緒に空気吸ってると思うだけで、もうムリ！」

それはアリスの、今の本音だった。

ざわめく参列者や招待客。

「ふざけるなよ！ 皆さんの気持ち考えないのか！」

ベルナルは、こんなにアリスがジコチューだとは思わなかった。

「だからうざいんだよ……」

アリスがそう言い残して、壇上からさっさと降りてってしまう。

（こんなのが結婚？ ありえない！）

来た道を一人帰っていくアリス……。

彼女の守護精霊たちが、ようやく気づく……。「リオの仕業だ！ 復讐として、リオは消える前にもう、『結婚生活の倦怠感』をアリスに植え付けてたんだ！！」

……ふふ、結婚が幸せ？ アリス。愛は冷えるのよ……

つづく

## 不思議ちゃんの冒険40

……テーブルに乗せられた手紙……それはざっと300枚……すべてがアリスあての非難文。

ベルナールはアリスの急変に悩みながら、いまだに彼女を理解しようとしていた。だってまだ数週間しかたっていない新婚なのだから……。

ベルナールが目を通す。

手紙のほとんどはご祝儀を返還するよう求める文で締めくくられている。

（人としてありえないとか、時間を返せとか言っというて最後は結局カネなのかよ、みんな……）

ベルナールも情けなくなってくる。『カネ』の2文字の前に、彼の愛もまた冷えてきていた。

（アリスもこんな気持ちなんだろうーな）

手紙の1枚が彼の手から落ちる。

なにげなく拾い上げるベルナール。

（……これは復讐です。アリスさんによろしくお伝えください。故ダルトン守護精霊リオ……）

ベルナルの手がぶるぶる震え出す。膝に力が入らない……。

「う、うわーっ！ 精霊の恨みが原因なのか……」

ベルナルの脳裏をよぎるリオの子供らしい顔と姿……ほんとによく知ってるダルトンの守護精霊だった。あの子が……。

（どーすりゃいいんだ、元守護精霊を相手に……勝ち目はない。自分だけじゃ……）

戦士アールの最期を思い出す。

（つつか、リオはアリスの守護精霊たちが無力化したって聞いたのに、……なんだこの手紙は……）

ベルナルに悪寒が走った。

つづく

## 不思議ちゃんの冒険41

結婚式の日以来、ベルナールとは一度も夜をともにせず、別居を続けるアリス。

せっかく彼がセラフィム卿の家に養子に来てくれたのに、アリスはなんの愛も感じなくなって……今はミントと一緒に爺の実家に別居していた。

「お姉ちゃん、やっぱおかしいと思ってたら……精霊のせいらしいじゃん。アタシ、エトスから聞いたよ、全部……」

じつはその原因になった戦士ダルトンの死が、ミントと深いつながりがあったのをミント自身が知らなかったのだった。

複雑な表情のミント。

アリスは、精霊リオの復讐という点には、あまり感情を抱いてなかった。

愛が冷めたのは他人のせいにはできないという思い……。

「お姉ちゃん、アタシはずっとお姉ちゃんの味方だから」

庭園に臨むバルコニーでお茶を飲む2人……。すべてが平和に見えた。

U  
U  
<U

不思議ちゃんの冒険42（前書き）

今回で終わりです。

それではごゆっくり…

## 不思議ちゃんの冒険42

……このRPGは妻のアリスが小学生ぐらいの時ブレイクしたやつだ……

……昔プレイしたゲームは彼女のような認知症患者にもリハビリになるとかで、（ぼくもやりたいんだがw）ここで見守ってる……

ヘルパーのジャンさんがゲーム機をアリスに渡すとそれはもうありえないぐらいに顔がしっかりして……その指の動きの早いこと……。

「アリス、夢中だねw」

『……愛が冷めたのは他人のせいにはできない……』

ディスプレイに出た言葉。 なにかこのゲームのミラクルワードらしいステージがクリアされたようだ。

「やった！ やった！」

子供のように大喜びのお前w

「ベルナルさん、アリスさん楽しそうでしたですね」

ヘルパーのジャンさん。 ほんといい方だ。

「あ、ラストクリアしましたよ！！ アリスさん」

流れる音楽…… ぼくにも懐かしい曲……

GAME  
OVER

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3377l/>

---

不思議の星のアリス

2010年10月17日02時48分発行